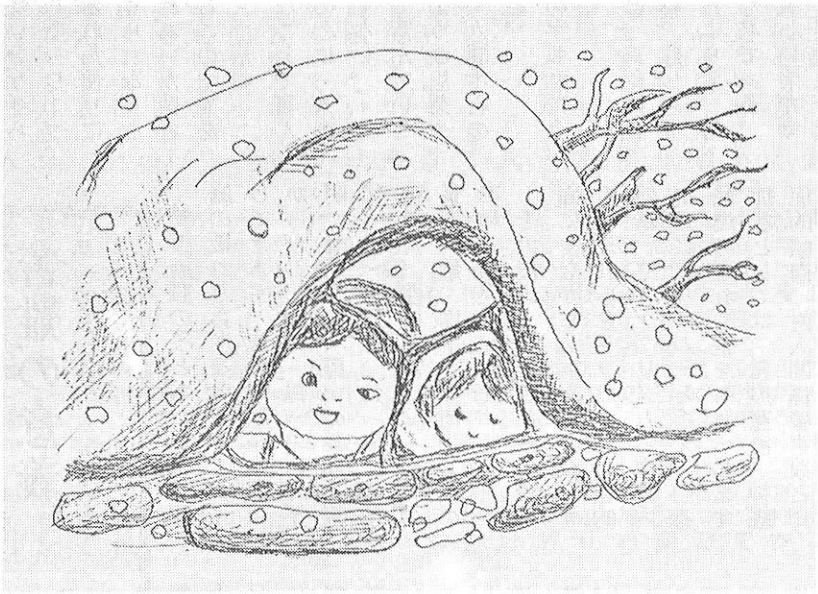
ひかりのこ　栄光を神に帰す　1990年12月2日　第 34 号

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480－72－3883
振替／東京3－128022
印刷／(株)ドモン企画



こちらからもメリークリスマス！

鎌田　洋子

こころの貧しい者（マタイによる福音書第五章三節）

理事長　福島　勲

戦争中のキリスト教会はみじめであった。人間がはびこって神様は隅っこの方へ押し込められた感じであった。

クリスマスになっても、日曜学校（今の教会学校）の生徒たちはプレゼントも貰えなかった。

欲しがりません勝つまでは、と煽られて、忍耐を強いられた。事実子どもたちに与える適当なものがなかったのだ。全く何もなかった。

戦地の兵隊さんを思えといって逆に慰問品を集めさせられた。

受けるよりは与える方が幸いである。（使徒行伝二十・三五）と小さい子どもたちにまじめになって言い聞かせ、教えたものである。

戦争末期わたしは、満州国の鞍山で小さい教会の牧師をしていた。どうにかして子どもたちに、イエスのお恵みを知ってもらいたかった。

受けるよりは与えることが、幸いだということを、説得する自信に欠けていた。

何とかして、具体的に与えられる喜びを知らせ、そしてそれ以上の恵みの賜物としてのキリストを知ってもらいたかった。

旅順でリンゴ園を経営していた家内の兄の所へいき、リュックサック一杯のリンゴを貰い、背負ってきた。

ささやかなクリスマスプレゼントとして、日曜学校の生徒たちに配った。

リンゴ一つもなかなか手に入らないときだったが、どれだけ子どもたちに喜んで貰えたか。そしてそれを通して、キリストの恵みをどれだけ理解してもらえたことかと・・考えている。

何もかも満ち足りているところでは、何をもらっても喜びではないであろう。恩を感じることも薄らぎ、機械化する中で、人の労苦に感謝も失われていく。自然にそうあることとして、当然のように思えてくる。

建物の入り口にたって、ドア

ーが自然に開閉しないとケチられているように感じる。ワープロばやりで、印刷された便りに彼の癖のある字を見られなくなると、人格的に触れあいが薄れていくように感じるこの頃である。

さまざまな余計なことで富んできたわたしたちの心に、人の恩恵など感じようもない。

心が余計なもので富んでいるとは、神を見失うような思想や、知識や生活の快楽、人間中心の驕り高ぶる心である。

そして、罪のつの字も意に介さない心である。

心の貧しい者とは、真剣に自らの罪を悔い、憂い、悲しみ悩む者であり、己にたよらず、神によりたのむ謙虚な心である。

このような心の貧しい者が幸いである。天国は、彼らのものであると、キリストは言われる。

このような者が、神の賜物としてのイエスの誕生を心からお祝いできるのである。

ちまたには、なんと多くのキリスト抜きのマス（祭）の騒々しく賑やかに行われていることか、ああ！。

苦難の意義

施設長　今関　公雄

養護施設の子どもたちは、家庭の破れと重荷を背負って入所してきます。養護問題発生理由からみると、父（母）の行方不明、離別、父（母）の長期入院、父（母）の死亡、父（母）の精神障害、性格異常、父（母）の長期拘禁、虐待、酷使、父母の不和、棄児の順になっています。

そのため、子どもたちの精神面に少なからぬ悪影響が及びます。それらをトラウマ（心理的外傷）やファミリズム（家庭内ホスピタリズム）と捉え、心身発達の遅れや歪をもたらします。症状としては、発達遅滞、神経症的傾向、対人関係障害などに現れます。

したがって、施設養護において入所児への治療教育を計り、将来の社会的自立に向け社会化の養育に腐心しています。二重の不幸になる恐れのあるホスピタリズム（施設病）の克服に努めています。光の子どもの家での家庭的養育はこれらの課題克服への試みです。担当保母が二～五名の子どもを責任担当し、日々子どもたちと起居寝食を共にしています。母性的養育にも努め、各家の男子職員は父性的役割を果たしています。

ところで、子どもたちの日常の表情からは、前記の苦難がなかったかのように思われることがしばしばあり驚かされます。家庭事情が複雑であればあるほど、子どもたちの健気さにハッとさせられます。併せて、苦難の意義をも再考させられます。

「艱難汝を玉にす」とは昔からの格言であります。聖書の使徒パウロの手紙にも次の言葉があります。「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」（ローマ人への手紙五・三、新共同訳）

確かに人間は、条件が整った所で安定を得て、素直な人柄が育ちます。真に磨き抜かれた人間性は、いわゆる温室育ちよりも風雪に耐えたところから生まれるでありましょう。この点、入所児の一人ひとりが、その重荷をむしろ糧として、苦難を潜り抜け乗り越える中から真のやさしさを体得して欲しいと思います。施設現場としては、先の聖書の言葉に希望を託して歩み続けます。

社会福祉の充実もこの視点から再考させられます。豊かな富があって、その配分に与ることで福祉の充実が計られることも事実です。しかし真の福祉は、苦難や重荷を共に担いあい、分かちあう共感共苦の連帯性の中から培われると信じます。苦難と重荷を背負った子どもたちや親たちの課題を、わたしどもと共に担って下さることを切望する次第です。

歳の瀬を迎えていつもながらの支援要請を心苦しく思いますが、「重荷を担う中で育つ」との言葉に立ち、沢山の方々のご尽力をお願い申し上げます。

エッセイ

猫との同居

中島　睦雄（県立高校教諭）

「人間が猫を飼っているという意識じゃあダメなんだよ、猫という、人間と親しい動物と一緒に暮らしているんだという意識が必要なんだ。」数人で雑談をしている時、私はそう言った。徹底した猫嫌いで通っているK君が、猫の持っている困った習性を、一生懸命説いていたからである。K君は、すかさず私に反論する「人間は猫と同居しているんではなくて、人間が猫を飼っているんだよ。もっとも衣の部分は、御自分の毛皮一着で生涯間に合わせているようだけど。昔の猫は鼠を捕るという形で人間の生活に貢献していたけど、最近は何もしないでキャットフードを食べ、贅沢な暮らしだよ。やっぱり人間が飼っているんだ。」というわけである。

私は、猫の代理弁護士ではないが、K君に言った。「人間だって同じなんだ。考えてみれば、人間の衣食住なんて、みんな自然が与えてくれているんだ。人間が地中に籾を蒔く、肥やしをやって稲が稔ったところで収穫する。しかし、そのプロセスは、すべて自然の摂理であって、人間の力じゃあない。むしろ神の意志と言うべきだろう。言いかえれば神様に面倒見てもらって人間は生存しているわけさ。ところが、人間は自然や神に感謝することを忘れて、むしろ神の意志に反するようなことばかりしている。猫の行動に文句を言う程、人間は立派じゃないわけだ。」K君は呆れて私を嘲笑した。「そういう人間に飼われている猫は、さぞ幸福だろうよ。」

「飼っているんじゃなくて同居だよ。」みんな大笑いになった。

そうは言ったものの、実は私の家でも、猫がもたらした小さな騒動の歴史というモノがあって、大変だったのである。

初代猫チビラは、極めて行儀の悪い猫だった。人間とうまく共同生活をしていく上に必要な、基本的生活習慣と言うべきものが身についていなかった食卓の上の魚を取って逃げる。そこいら中を引きずって食い散らかす。そして食べ残す。しかし、こんな程度は猫の社会では当たり前のことで、人間社会の道徳律と少しばかりの〈ずれ〉があるのだと思えば我慢もできるのである。だが、なかなか我慢し難かったのは、布団の上に大小便をする事だった。これにはみんな閉口した。特に母の布団が好きだった。母は、私の家では一番よい布団をつかっていたが、それが軽くて温かく、ふわふわした感じなのである。猫はそのふわふわが、ことのほか好きで、ちょっと隙を見ては、そっと足元のあたりに上がり、思いきり排泄をして、無上の快感にひたるのである。そして、素早く姿を消してしまう。猫の小便と言うのは、布団の表面に、何かキラキラ光る結晶体のようなものを浮かべて、その匂いと言ったらすごいものである。まして、〝大〟においておやである。しかも、家中で最も猫嫌いが母である。その後の一騒動を避けるための、事件のもみ消し作業は大変であった。私の家族たちは、歴代の猫たちに、この他さまざまな形で悩まされ続けてきた。

その上、どんなに可愛がっても、猫は打算的で情が薄い。冷たいのである。腹がへっていれば、にゃあにゃあとしつこくつきまとうが、満腹の時などは、呼んでも振り向きもしない。丸くなった身体の端っこにある尻っぽの先をちょと動かすだけである。しかしこれが猫なのであって、猫に人間の生活規範を押しつけることは出来ないであろう。

作家の坂口志保さんは「正直なところ私は猫に飼われている」と書いている。又「猫に仕える」とも言っている。ここまで来ると立派である。

ところで〈猫〉について大口をたたいた私も、苦しみながら悟りを開こうとしているだけである。だが悟り切れない未熟者。時々白チビや白チビチビをつかまえて、窓から放り出したり、ギャオーと鳴かせたりしているのである。

虹の国からスペシャル

虹の国から スペシャル
クリスマスと子どもたち

中二　匠

クリスマス、それはイエス・キリストの誕生日。それを覚えたのは、光の子どもの家にきて。

クリスマス、それは、光の子どもの家ではページェント。ページェントなしのクリスマスはない。

ページェント、それはイエス・キリストの誕生の次第を、聖書朗読と歌と振り付けで表現し、私たちへの最高の贈り物として感謝し、平安を祈る。それはすべての人が参加する礼拝だ。

ぼくは、去年、東方から星に導かれて礼拝に来る三人の博士の一人を演じた。その前の年は聖書朗読。

毎年、同じイエス・キリストの誕生の次第を演じ表現しているのに、いつも、いつも感動してしまう。何故だろう。たぶん、一生懸命練習し、それを見てくれたお客様が一緒になり、喜んで、礼拝に参加してくれる。それがまた、僕たちに伝わってくるからではないかと思う。ページェントを終えると、そこに集まったみんなの心が暖かくなったような気がする。とても不思議だ。もしかすると、あの博士たちも、生まれたイエス・キリストを礼拝した時、そんな気持ちになったのかも知れない。

☆　☆

四年　加津子

きよ年のように、お友だちをたくさんよんで、すてきなページェントをしたいな。きよ年はよんだ人が全員来てくれました。今年もそうだといいな。

きよ年は、おねえさんたちがたくさん来て歌を歌ってくれました。今年もそうだといいな。プレゼントこうかんも、わくわくします。いろいろの人のどれかがきます。とくにおいしいケーキが楽しみです。楽しい一日にしたいです。

☆　☆

六年　逸郎

クリスマスを毎年楽しみにしています。イエス様のお誕生日をみんなでお祝いする日です。三年になって教会学校の先生のお話などで、イエス様が人間のために役立っていることがよく分かってきました。神様やイエス様のことを教えてくれる人が集まって教会学校ができ、どんどん広まっていって、イースターやクリスマスや色々な行事が行われるようになったのです。

イエス様のことをお祝いするクリスマスが特に楽しみなのです。

☆　☆

二年　恵美

ばらぐみのときのページェントで天しをしました。あたまにほしをつけて、手をはねみたいにうごかします。ほんとうの天しみたいなきもちになります。

おじいちゃんとおばあちゃんが見にきてくれました。だからドキドキしました。おきゃくさんがたくさんでだれがだれだかわかりません。でも、おじいちゃんとおばあちゃんはどこにいるのかわかりました。

☆　☆

中一　睦男

光の子どもの家に来る前に、数回教会に行った事がありました。でも、ここに来て初めて神様のことを知ったような気がします。ここでの礼拝や、教会学校などで、イエス様や聖書のことを教えてもらう度に、だんだん神様を信じることとはどういうことかが分かってくるような気がします。

そして、クリスマスのページェントの練習などではいっそうはっきりしてくるようです。だから、僕は毎年、クリスマスが来るのが楽しみです。それに、プレゼントも大きな楽しみです。

☆　☆

ばらぐみ　珠弥

イエスさまへ

イエスさまおたんじょうびおめでとうございます。

イエスさまは　てんごくにいるんですか　おりこうでいますから　てんごくにいかせてください　くりすますにはわたしは　せいかたいになりますから　てんごくでみててください　イエスさま　私はイエスさまのことをしんじています　これからもわたしのことを　まもってください

☆　☆

中一　晃子

初めてページェントを演じたのは、小学三年の時でした。きちんとできるかと、とてもし緊張したのを覚えています。主役のマリア役だったのですが、自分では、一回目にしてはよくできたと思いました。翌年は宿屋のおかみ、そして二年続けて天使長を演じました。

大変だったのは、天使長です。二歳や三歳の女の子の沢山の天使達を練習の時は、まとめなくてはなりません。中には、言うことを利かない子がいて困りました。でも本番ではきちんとやってくれたので助かりました。

天使長は、救い主イエス様が誕生したという神様のみ言葉を人々に伝える役目を持っていました。一番初めにそれが伝えられたのは、貧しくて、とても苦労していた羊飼いたちでした。それが心に残っています。

☆　☆

一年　多歌音

くりすますのページェんとをしました。うたもうたいました。わたしはたんしになりました。まりあさんとよせふさんは、とてもさむいところにいました。うまごやであかちゃんをうみました。あかちゃんはイエスさまです。ほしがきらきらひかっていました。

☆　☆

四年　滋

クリスマスは、イエス様の誕生日。クリスマスツリーをかざります。一番上にお星様。お友だちがたくさん来てくれた。おいしいご飯も食べました。イエス様のお生まれになった様子をページェントでやった。みんなが見ていた。交換プレゼントもにぎやかに、ぼくに当たったプレゼントは誰の用意したものだろう。おいしいケーキも食べ、ゲームもたくさんしました。みんな笑顔で楽しい一日です。

☆　☆

三年　紅子

私はクリスマス近くなると、わくわくします。それはクリスマスが大すきだからです。クリスマスには、ごちそうを食べたり、プレゼントこうかんをしたりするけれど、一番楽しみなのはページェントです。

第一アドヴェントの日に役が発表されてれん習が始まります。発表の時は、「どんな役かな」と一人言を言うこともあります。好きな役だとうれしくなります。すきになれない役でも一生けんめいやっていると大すきになります。当日には、うまくできるか心配になります。きょ年はやど屋のおかみでした。今年は何の役か楽しみです。決まった役をはりきってがんばります。

☆　☆

二年　萌季

去年のクリスマスにお友だちをよびました。ページェントでうたをうたう人になりました。ほかの人は、天しやマリアやヨセフなどいろいろなやくに

クリスマス おめでとう

☆ 神さまからのおくりもの ☆

なりました。なかには私と同じうたをうたう人も何人かいました。

はじまったとき私はどきどきしました。ほかの人もどきどきしていると思いました。でもうたっているときは、どきどきしませんでした。うたいおわったときは、すっきりしました。まちがえずにうたえたので、よかったです。

ことしは何になるかたのしみです。また同じのだったらいいなと思います。

☆　　☆

ばらぐみ　一志

あのね、ぼく、さんたさんにあったんだよ。きょねん、ぼくが5さいのくりすますいぶのよるだよ。

「かずしくん、かずしくん。」と、こえがしたんだ。ぼくは、すぐ、さんたさんだ！ってわかったよ。とってもやさしかったよ。だって、とってもやさしいこえだったもの。　ぼくは、がばっととびおき、いっしょにめをさましたたかちゃんと、さんたさんにくっきーをあげたんだ。さんたさんは、にっこりしたよ。ぼくもにっこりしたよ。

そのくっきーは、だい4あどべんとといぶがいっしょのゆうしょくのとき、4こもらったくっきーなんだ。それをさんたさんにあげようねって、たかちゃんとやくそくしたんだよ。

さんたさんはどこかでみたことのあるかおだったけど・・。まっいいかそんなこと。でも、さんたさんって、ぼくたちのちかくにいるのかもね。

さんたさん、ことしもあいにきてね。まってるからね。

☆　　☆

三年　研一

きょ年はさわいで、いっぱいしかられました。今年のクリスマスにはぜったいおこられないようにしたいです。うるさくしゃべらないで、きょ年よりたのしくにぎやかにやりたいです。

一番楽しいのはプレゼントこうかんです。食事はぜんぶおいしかったです。ページェントもがんばります。はく手をたくさんしてほしいです。また友だちをよんで見せてあげます。そしてぼくの思い出にしたいです。早くページェントの練習をしたいです。

☆　　☆

五年　光子

今年もクリスマスがやってきました。クリスマスはイエス・キリストの誕生日です。光の子どもの家では、みんなでページェントなどをやってお祝いします。でもみんながお祝いできるわけではありません。まず、貧しい人がいるということを初めて知った、リリーという犬のお話を書きます。

リリーは大金持ちの家で飼われている犬で、いつもみんなの犬から、先生と呼ばれていました。だから、暮らしに不自由なく暮らしていました。

そしてクリスマス。その日は雪が降って、ホワイトクリスマスになりました。リリーは散歩をしていました。みんな楽しそうでした。だからリリーもうきうきしていました。リリーは、街のいたるところは大体知っていました。

その上リリーは「知らないところへ行くのは勇気のいる冒険なんだ、だからぼくは、勇敢な犬なんだ」と思い、いろんな所へ恐れずに進みます。いくつも角を曲がりました。そして長い真っ直ぐな道を走っていくうちに、いつも飼い主と一緒に買い物にきているお肉屋さんにたどりつきました。飼い主がおとくいさんなので、お店の主人アイリッシュさんはリリーのことは知っていました。「リリー、よくきたね。お使いかい？。でもいつものかごがないね。」といいながら、いつもの牛肉と豚肉をつつんでくれました。リリーは困った顔をしました。お使いではなくて遊んでいるうちにきてしまったのですから。でもアイリッシュさんは、

「お金は今でなくてもいいよ。いつでもいいんだよ。」と言ったので、リリーは、またトコトコ歩きました。

やがて、さみしい所に来てしまい、気味が悪くなり、急いで帰ろうとした時に、しくしく人の泣く声が聞こえてきました。足を止めて耳を立ててると、突然、ウェーンと泣き出して、

「もう、ウチにはパンがないわ。ああ、どうしたらいいの。クリスマスだというのに！」

リリーは、ハッとして、食べるモノがないほど貧しい人がいることに驚いてしまいました。みんな自分と同じように、お腹がすいたな～と思う頃に「ほらご飯ですよ。たくさん食べて。」と食事になり、寒ければ暖房を、暑ければプールというような生活をしているのだと思っていたからです。先生などと呼ばれていた自分が何も知らない愚かな者に思えて情けなくなりました。

急いで家に帰り、かごにフランスパンやお菓子、今もらってきたお肉などをたくさん入れて、もとの所に戻り、その家の戸を前足でたたきました。

家に中では、みんなが借金取りかと思い息を殺して震えていました。でも、一番小さな女の子が、「だ～れ」と言ってそ～と開けて見ると、立派な犬がチョコンと座っているではないですか。「かわいい！」と言って、その子が外にでてきたので、リリーはかごを置いてもと来た道をかけて帰りました。

後ろからみんなの喜びの声をきいて、よかった！と思い、嬉しくなりました。誰かの役に立つことがこんなに素敵なことだと初めて知ることが出来ました。

世界には、食べるモノがなくて死んでいく子ども、お医者さんがいなくて死んでいく子ども、いつも大人がしかける戦争で殺されていく子どもなどがたくさんいると聞きました。そんな子どもが一人もいなくなり、一日も早く全部の人が幸せになれるように、そして、みんなが喜んでクリスマスを祝えるようになれますようにと、心の底から願わずにはいられません。

☆　　☆

一年　たくや

いつも、クリスマスには、ページェントやキャンドルサービスを、やっています。クリスマスツリーもかざっています。とてもおもしろくて、うれしいです。

ことしは、せいかたいになって、きれいにうたをうたいたいです。ちゃんとお話をきいて、お手つだいもするので、サンタクロースにきてほしいです。クリスマスがたのしみです。

☆　　☆

中二　悟

僕たちは、イエス様が、この世に生まれてきた状況の劇、ページェントを演ずることによって、クリスマスの礼拝をします。それぞれの年のページェントで、いろいろな役を演じ、この家で四回のクリスマスを経験しました。初めて中学生になった去年は、聖書朗読の役でした。

毎年配役は変わります。寒くなってくると今年のページェントが気になり始めます。ぼくは、監督になったつもりで配役を想像します。みんなそれぞれ自分のやりたいと心で思っている役があると思いますが、今年はぜひ、ぼくを含めた三人の中学生男子で「東方の博士」をやれたらと思います。ぼくは、星を見るのが好きで、買ってもらった天体望遠鏡で時々素晴らしい星の世界に遊びます。ベツレヘムの赤い星をたよりに苦しい旅を続けた博士たちに憧れます。博士たちの知恵と勇気はすごいなあと思います。あのころ、旅をする事はどんなに大変だっただろうか。ぼくも、目標に向かって困難に負けないで歩き続けられたらと思います。

花のささやき

現場から

四季の彩り

竹下　由香

ウィンドショッピングをしていると、赤と緑で彩られた小物たちが目にとまるようになりました。そろそろ街には沢山の灯がともり、どこからともなくクリスマスの歌が聞こえてきます。みなさんはどのようなクリスマスを迎えられるのでしょうか。

光の子どもの家でもクリスマスの準備を始めました。担当者は各々の子どもたちに、何か手をかけた、そして心を込めたプレゼントを準備します。二四日イヴの夜、寝静まった子どもたち一人ひとりにサンタクロースが届けてくれます。クリスマスの朝、昨夜の夢の続きのような枕元のプレゼントをガサガサと明けるときの子どもたちの顔を思い浮かべると、なぜか私まで嬉しくなってしまいます。そんな子どもたちのことを思いながら。不器用な私もプレゼント作りに励みます。

これまでの二回のクリスマスは、仙道家で匠と加津子と一緒に迎えました。どういうわけか、ここに来るサンタクロースは、子どもたちをわざわざ起こしてくれるのです。サンタクロースは寝ぼけている子どもたちに「メリークリスマス！」の一言とプレゼントを置いて帰ります。何度呼ばれても起きない子、「メリークリスマス」と寝ぼけながら応える子、あまりの驚きに、キョトンとしている子など様々です。私たちはそんな子どもの反応がとても楽しみです。二五日の朝食の話題は昨夜のサンタクロースについて集中します。サンタに合えたと純粋に信じている子どもたち。真正直な研一は「昨夜のサンタ、何だか田中先生みたいだったなあ」と言い出し、職員たちはあわてて「何言ってるの、田中先生は眼鏡をしているでしょう。サンタさんはどうだった？」などとフォローしたりしました。すべて事情を知っている匠は、私が作ったことも知っているウォールポケットを見ながら「サンタって、こういうの作れるんだ。」と呟いてみせます。何度起こされても起きなかった加津子は、サンタに会えなかったと悔やみながら、「サンタさんってすご〜い、上手だね。どうやって作ったのかな。由香ちゃんはサンタさんとお話したことある？」と、何も疑いません。この子たちはいつまでサンタクロースの存在を信じながらクリスマスを迎えられるのでしょう。

クリスマスの楽しいエピソードはまだまだ沢山あります。でも、ページェントの練習やプレゼントの準備など、形に見えるモノに対しては一生懸命やってきましたが、もっと大切なことを忘れていたのだと、昨年のクリスマスを終えて気づきました。

いったいクリスマスとは何なのか、子どもたちに殆ど伝えないままに終わってしまったように思えたのです。どうしてこんなにクリスマスが嬉しいのか、楽しいのか、周囲のにぎやかな雰囲気に紛れてしまい、自分自身の中でも確認できないうちに終わってしまったようで・・。

クリスマスが子どもたちにとって、ただおいしい料理を食べて、プレゼントをもらう時に私はしてしまっていたのではないかと反省させられたのです。

今年は原田家で迎える初めてのクリスマスです。そして、亜季羅と啓二もここで迎える初めてのクリスマスです。もしかして、二人がクリスマスらしいクリスマスを家で迎えるのは初めてかも知れません。クリスマスとは言ったい何なのか、全く知らない二人なのですから。そんな二人のクリスマスに、初めての色をつけるのは私であり光の子どもの家なのです。どんな色になるのか、責任重大です。

「サンタクロースなんかいないよ。」と言っている亜季羅が、イヴにサンタクロースの顔を見て、どんな顔をするのでしょう。プレゼントを開いて・・などと考えながらプレゼント作りに精を出します。ここにきてから言われ続けてきた、『ほんとうに伝えるべきメッセージ』に思いをめぐらせながら・・。

みなさまとともに、クリスマスの豊かな祝福をお祈りします。

★プリズム

原田家日記

十月にはいると原田家では、誕生日のラッシュが始まります。十一日は小林悟、一志が十四歳と六歳に、十二日は多歌音七歳、三十日は晃子の十三歳と、一つづつ大きくなります。

誕生日はその日に、それぞれの家でお祝いします。でも、多歌音ちゃん、一志、悟は、誕生日が続いているので、昨年は十一日に、つまり悟と一志の誕生日に多歌音ちゃんも合同でやりました。

それで、今年もそういうことで、と話は進みました。ところが多歌音ちゃんの「誕生会、悟君たちと一緒なの」と、不満そうな声。昨年にはなかった多歌音の表現に成長を知らされました。子どもたちの成長が、おざなりに流れてしまう日常に意義を申し立てます。

悟は思春期真只中です。来年は高校受験を控えている微妙な年頃ですが、妹の晃子の三十日の誕生祝いでは、「目標を持ってがんばるように」と、なかなか兄らしい言葉を贈っていました。晃子も十三歳。四歳の福子や多歌音と別の部屋で一人の寝起きを始めます。

十一日に六歳になった一志の誕生会が、幼稚園でもありました。誕生者が親と一緒にステージに上がり、マイクでクラスと名前と将来、何になりたいかを言います。昨年の一志は何も言えませんでした。今年は何日も前から、ちゃんと言えたら、一志の心に秘めた欲望であるマクドナルド・ハンバーガーを一緒に食べに行くことを竹花保母と約束しています。一志の意気込みもビシビシ伝わってきます。一志の番になりました。ステージの中央に立って、

「バラぐみ、たがみ、かずし、大きくなったら・・」ここまではすらすら・・。これはいけるぞ！と思って手に汗を握ります。でも・・沈黙・・。「ウインスペクターになりたいです」といいたかったのですが・・。一志の顔には、悔しさがにじみ、涙が・・。

来年は一年生。来年の誕生日には・・。みんな、もっと豊かに大きく成長することが出来ますように。そして私たちも！　池田　祐子

★プリズム

まなざし……

佐藤家

光の子どもの家のクリスマスとページェントは、分けて考えることが困難なくらい、子どもたちの心の中で結びついています。

紅子は、ページェントが大好き。自分の役だけでなく、同じ担当グループの子どもたちの振り付けを考える手伝いをはりきってします。歌はもちろんのこと、いつの間にか一緒に躍っています。そのエネルギーに雅志は眠い目をこすりながら、ベソを半分かいて練習させられ、滋は横を向いて「関係ないよ」とでも言いたげに、その練習を拒否しているようなふりをしながら、全身を耳にして、背中に目をつけて様子を感じとっています。だから、紅子がやって見せた場面や部分は上手に出来ます。その滋は、お兄さんの逸朗に「滋はまじめにやらない」と文句をつけられながらも自分が以前に練習して覚えていた振り付けを教えます。逸朗はカンがいいのかそれでも少々アレンジして覚えました。光子はページェント当日になっても振りを覚えることが出来ず、ハラハラドキドキさせられました。練習した通りにではなかったのですが、それがまた様になっていて、練習したどんな振り付けよりも素敵なマリア様になっていました。

去年は各々が自分の希望していた役になりました。練習しながら、イエス様の生まれたときの状況や、誕生を知ったまわりの人々の様々な想いや、苦労をしみじみと考え、聖書の世界を身近かに感じた大切なひとときでした。

毎年同じことをしているのに、子どもたちの成長によることもあるのでしょう、一年ごとに、思いがけずに表現に深まりや高まりを感じさせられ、私自身にも熱い想いが与えられてきました。

今年のクリスマスは、どんな思いが与えられるのか。子どもたちを通して、この季節に、私たちに与えられるメッセージを、アドヴェントカレンダーをめくりながら、心を鎮めて待っているのです。

素敵なクリスマスの祝福をお祈りします。　秋元　光代

★プリズム
子どもたちの季節

仙道家

落ち着きや集中力がないなどで学校に入る時に心配だった亜季ちゃん。ほかの子に比べれば少しゆっくりでしょうが、がんばっています。入学時五十音も思うように読めなかった亜季ちゃんが、今は本読みが大好きです。担当者との算数のオニの特訓もがんばり、成長には目を見張るほどです。とてもがんばっている亜季ちゃんですが、学校での様子は、担任の先生も四苦八苦のようです。力が足りなくて・・と、いつも切実な思いをお伝え下さる先生です。大切な協力者のお一人として連絡やご相談しながらの試行錯誤の毎日です。

授業中の教室に寝ころんでお手あげの時に、菅原先生に「勉強しない子どもは学校に行かなくてもいい。学校に行かない子どもはここにはいられない」と言われ、「今度、ちゃんとできないときは、亜季ちゃんと私が一緒に出ていく」ことを条件にお詫びし許して頂きました。その後、暫くはがんばっていました。でも、とうとう同じような事があり、みんながダイニングにいる時、菅原先生が、「さあ、亜季と倉ちゃんの送別会はいつがいい。」と言い出しました。一人一人に問いかけられ、黙りこむ子、うつ向く子、泣き出す子。テーブルに伏してしまう子・・。深刻な時が流れ、菅原先生が「じゃあ、今度亜季がバカなことをしたら、自分が出て行くと言う者がいたら、今回は許してやるぞ。」と。少しざわめき、また深刻に・・。二人のことは許してほしい、でも自分が出て行くのは・・。身の危険を冒してまで私たちを救うと言い出す子はいないだろうと思っていました。と、突然、四年生の嬉が「アノ・・」と。しかし、「何だ、お前がそうしたいのか」と聞かれ、黙ってしまいます。暫くしてまた「オレが・・」と嬉。「いいんだな。本当に出て行ってもらうよ。」と念を押され、頷く嬉の瞳に美しい涙が輝いて・・。

そんな子たちに助けられ、教えられながら六回目のクリスマスをこの子たちと迎えます。みな様と共に祝福を祈りつつ。倉沢　智子

私のクリスマス

クリスマスが近づいてきました。街にはクリスマスソングが流れ、店先にはプラカードを持ったサンタクロースが立っています。

学生の頃の私は、そんな街の風景が嫌いではありませんでした。ミッション系の大学で専門の社会福祉学よりは倫理学や哲学に興味を惹かれ、キリスト者の友人を持ち、自身も聖書と全く無縁ではない生活を送っていた私は、それがキリストとは全く関係のない商人によって作られたクリスマスであろうと、一年に一回、何となくみんなが温かな気持ちになれるその季節が来ると、、友だちとパーティを開くのでもガールフレンドと過ごすわけでもないのに、嬉しい気持ちになったものでした。

昔読んだ星新一のショートショートに、こんなのがありました。高度な文明を持ったある星の宇宙人が、嘘つきで傲慢で好戦的な生物が棲むという惑星を破壊しに行きました。そんな生物を放置しておいたら、宇宙の秩序が保たれないという理由です。ところが、いざその星に行ってみると、人々は皆楽しそうに肩を組み、手をつなぎ、歌をうたっているのです。争いなど、どこにも見あたりません。

「どうやら調査員がいい加減な報告をしたらしいな。」と呟くと、宇宙人は自分の星へ引き返して行きました。クリスマスの夜、こうして地球は救われました・・。というのです。作者はもちろん皮肉を込めて書いたのでしょうし私たちもそれがおかしくて笑うのですが、心の底から笑えないのは何故なのでしょうか。

光の子どもの家に来て、幾度かのクリスマスを子どもたちと共に過ごしました。眠い眼をこすりながら夜遅くまで準備したことなどを通して、クリスマスがただ楽しいだけの一時では決してないことを、改めて知りました。未熟な私たちが、どれだけのことを子どもたちに伝えられるか不安ですが、クリスマスはもうそこまで来ています。さあ、準備を急がなくては・・。

坂巻　直之

養護メモ 31

信じる（その2）

菅原　哲男

担当者の結婚など様々なことがあって、彼が五年生の二学期に兄妹は佐藤家から原田家に戻り、インテークワークを担当した竹花保母のもとにかえった。

その年の九月、年間養護計画を見直して『十歳前後という最も多感な時期に入所して一年半、落ちついた人間関係とその生活を経験できなかった兄弟に、それらを準備し、整えなければなかったにもかかわらず、身近な存在に近づきつつあった＜担当者＞は大人の都合で変わって行った。「家」で、学校で、それぞれの場で、持っている本来の＜よいもの＞を充分発揮できるわけもない状況をつくってしまった。様々な意味で困難を乗り超えられる自信を持ってほしい。この願いを実現するためには、安心して自己を表現できる人間関係を結べることが前提となる。「失敗」や「回り道」もあるだろう。最低限の課題を克服していくことができるよう援助していく。学童として、リーダーとして課題と期待が増え続けた。ある時は口を閉ざし、ある時はやるべきことを「やらない」ことで表現した。そんな日常から抜け出すことを目指す。』と竹花は決意を表現した。

九月　学校では「やらないこと」での表現の毎日が続いていた。竹花は教師と連絡を取った。

担任教師は、「誉めようほめようと見ているのですが、なかなか・・。」と言い、提出物を出さない、出された算数の問題をやろうとさえしない、窓ガラスを割っても謝ろうともしないなどなど・・。

これを、担当者が変わったことでの退行現象ととらえ、多少の＜赤ちゃん返り＞を認め、よりかかっても大丈夫な人間関係を創るという出発点に戻って取り組むことを会議で確認し、教師にも協力を要請した。

日常的な暮らしや学校での生活では、約束についての意識が薄弱でそれほど罪悪感もない様子で破り、課題を避け、要求に応えない状態が続いていった。

今年から始めている剣道の練習も休みがちである。＜頭が痛い＞＜お腹が痛い＞などの身体的訴えが多く、準備をゆっくりして遅れるなどを言い訳とした。

仮病については＜病気＞として扱うことにしている。それも出来るだけ重篤な患者のように。元気盛りの子どもが相当の理由もなしに、日中寝ていたいと思うのはすでに病気なのである。訴えた通りの病気でなくても、甘えの欠乏が耐えられる限界を超えたとか、精神的スタミナ切れとか、私はこの状態を＜愛情欠乏症候群＞とよんでいる。

九月中に竹花は、二歳の福子、四歳の多歌音と一緒に五年生半ばの彼と四回も入浴している。四年生の妹には、四回目に「お前は僕が出てから入れ」と言って恥の感覚を見せた。風呂では精いっぱいふざけ楽しんだ。

特に、就寝時の関わりも大切にし、担当の四人の子どもと一緒にふざけながらのスキンシップを心がけ、本を読んでやり、お祈りをして静かに休む。

保母の隣に寝ることの要求や、布団の中に入ってくることもしばしばになってきていた。

また、保母と一緒にプリンをつくったり、年少の誕生日に手作りのプレゼントを用意したりしながら、一か月を過ぎる頃には、保母や男子指導員などの促しがあれば、宿題をしていく気配が示されてきた。

何よりも、毎月の最後の練習日に行われる剣道の月例試合で見事に優勝することが出来た。大きな手がかりになる。

＜信じる＞ということは、徒手空拳でいることではない。一緒に努力をしながら、待つのである。私たちは、一緒に何かを成そうと懸命に努力するほど、早く成るように成果を急いでしまう。そして成らないとして諦めるのも早いのである。

子どもと生活する中で、大切なことは＜信じ＞て待つことである。子どもは、いい加減に生きようと努力しているのではない。そのことをいつまで信じ、待てるか。それを試されているのかもしれない。（この項続く）

日誌抄

九月一日～十月三十一日

九月一日　栗原忠さんよりいつものお励まし。ありがとう！

四日　上野交易ｋｋよりジュースをたくさん。感謝。

七日　（株）タナカの田中作次社長、阿部勇次専務両氏のご好意で、この五年間家庭用紙類をご寄贈頂きました。この日もワゴン車二台に満載のティシュペーパーなどを。感謝。

十七日　加須市の梅沢氏よりお米を、町内の佐藤氏よりジュースをたくさん。

○江森ヘヤーサロンの店主、今月も。ありがとうございます。

二九日　地元後援会の啓蒙活動第一回講演会を元児童相談所長鈴木佳男氏をお迎えして。

十月一日　幸手市の中川氏より衣類をたくさん。　感謝。

二日　小学校運動会。限界に挑戦して走り、跳び、演技する。陽光を浴び子どもたちの力感が溢れる。この力を教室でも。久しぶりの家族も駆けつけて。

三日　町内恩田氏より衣類をたくさん。ありがとう。

七日　地区運動会。大人も負けずに。フレーフレー。

○東京の久保さん、変わらないお励まし。ありがとう。

九日　中央児童相談所より三名来訪して子どもたちの近況や課題の解決などを協議。

十日　幼稚園運動会。快晴の運動場に小さな演技者たちが所せましと踊り、駆け、投げる。その動作の度に詰めかけた観衆がどよめく。どうなることかと心配だらけの入園当時がウソのように自信を身につけた子どもたちのしぐさ。指導者への尊敬と信頼を新たに。

十三日　大利根剣友会の青鹿氏今度も竹刀を。感謝。

十四日　町内の小塚氏より日用品をたくさん。ありがとう。

二十日　新松戸で学習塾を経営している文京区の田中博正氏ご夫妻来訪。子どもたちの将来の進路を考え、腐心してきた私たちの最も弱い学習指導について、ご協力とご援助を申し出られる。数日お出かけ下さり、坂巻、檜山両指導員に、子どもたちに向かい合う態度や考え、そして、長い間の経験によって体得された極意のようなノウハウなども惜しげもなく、熱心に、ある時は、陽のある頃から深夜に及んでご教示下さる。学習指導体制を再検討して新たに。

二四日　中学剣道新人戦、郡市大会に菅野、大森出場。大利根中学剣道部優勝。来月初旬の県大会出場権獲得。万歳！

二五日　幼稚園年長組の保育参観。子どもたち三人がそれぞれ懸命に課題に取り組む姿は、来春の小学校入学を引き寄せているように見えて・・。

二八日　中学授業参観。辺りを気にしながら、出入口の方をチラッと見やり、保母の顔を確認して照れ、知らん顔になって授業に集中のフリ。もう一年で高校受験が！。

○田中博正氏来訪。光の子どもの家全員が受験へむけて意識を整える必要をご指摘。今後数回のご講義をお約束下さる。たくさんの、熱い思いの人々に励まされて今年も・・。（くら）

訂正。三三号一頁下段後から四行目「大袋」を「大入り袋」に。同十六行目たくさんの落ち穂に。

反射光

園庭の枕木の歩道が朝日に反射し、登校の子どもたちの息もけむります☆いよいよクリスマス。キリスト教がバックボーンの光の子どもの家のクリスマスを、と祈りながらつくってきました☆職員たちと討論を重ね時には激し思いを尽くして☆それにしても、子どもたちの中に思いがけなく育っている〈クリスマス〉を編集しながら発見し感動しました☆何の討論も説得もしなかったのに！☆大人を見て育つ証を見る思いです☆それ故更に関わりと生き方など姿勢の制御に心しなければ・・☆しかし、どんなに制御したつもりの姿勢も、破れや汚れなどを見せるだけなのは必定です☆自己の不完全を思い知ってはじめて求める完全者の存在を。完全者としての純白のイエス！をこそ子どもたちに見てほしい、示したい☆クリスマスに染まっていく光の子どもの家の季節の中で設計の、建設の折りに願い祈ったクリスマスがにじんで重なります☆愚かな遅々とした歩です。ご支援を！（哲）